

# JGFA NEWS

FRESHWATER, SALTWATER AND FLY FISHING

COLD SNAP ISSUE



瀬能宏さんインタビュー

Hiroshi Senou Interview

イベントレポート

Event Reports

記録報告

New Japan/World Records

東京都まき餌釣り解禁

Chumming Now Legal in Tokyo

ボトムフィッシングルール明確化

IGFA Rules on Bottom Fishing

And more

とても暑い、夏から秋でした。太陽が出ている間に釣り場に出かけた方なら、日差しの容赦なさを実感されたことだと思います。海の変化も、もっぱら陸上にいる私たちにすら、ただちにわかるくらいになってきました。たとえば今年の下田カジキ釣り大会では、もっぱら小型のバショウカジキがメインで、例年多数を占めるクロカジキはほとんど上がりませんでした(バショウカジキのストライクは、フッキングに苦労されていたようです)。「いつもの季節にいつもの魚がいない!」という声は、日本全国、世界各地から聞かれます。異変である、異常であるというコメントがメディアにもあふれ、海のことを考えた人も多かったのではないかと思います。

先ごろ、『ブルー・マシン --- 海というエンジンと人類史』という翻訳本が出版されました。著者はヘレン・チエルスキーさん、英国の研究者です。ある批評者は「物理学の世界にもデイビッド・アーテンボローのような解釈者が必要。ヘレン・チエルスキーは強力な候補」と言いました。英語の題名を直訳すれば「海がわたしたちの世界をいかに形づくったか」となり、内容の理解の一助になるかもしれません。発売されるとただちに各方面からの賛辞を受け、日刊新聞ザ・タイムズによる年間最優秀科学書に選ばれ、優れたネイチャーライティングに贈られるウェインライト賞を受けたこの大著が、わずか1年後に翻訳出版されるとは思いもよりませんでした。ジャレド・ダイアモンドの『文明崩壊』の読み応えに迫り、かつ彼女自身が行ったフィールドワークの記録も盛り込んで科学的な観察者の目も失わないこの本は、晦渋なところもありますが、過去と現在を取り上げ、生き物にも興味を持つ物理学者の目で、海洋を全地球的なメガ機械と解釈するもの、きわめて斬新な切り口だと思います。釣りを通して海の一体性をつよく実感している私たちなら、彼女の主張が理解でき、かつ現在の切実さも納得できることでしょう。

ジャパンゲームフィッシュ協会  
専務理事 東 知憲



(出版:エイアンドエフ 464ページ 3520円)

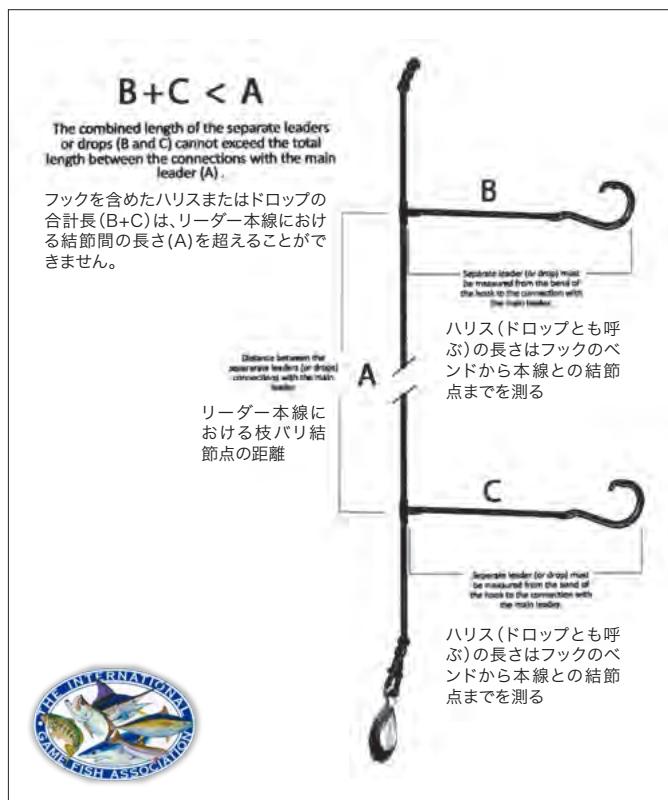
## エサ釣りの2本バリに関するルール明確化

現代的な倫理観にもとづき、次世代を見据えた倫理的な釣りを提唱するインターナショナル・ゲームフィッシュ協会 (IGFA)は、このたびボトムフィッシングの2本バリ仕掛けに関するIGFAルールの文言を見直しました。IGFAは、2024年9月11日に以下を発表しましたので、日本記録も2024年12月7日以降はこれに準じることとなります。

最新版はこう改定されています(暫定訳)。

「ボトムフィッシングの場合は、シングルフックを2本まで使用することができる。2本のフックは、別々のハリスまたはドロップで取り付けなければならない。フックを含めたハリスまたはドロップの合計長は、リーダー本線に設けられた接続部間の長さを超えることができない。2本のフックは、別々の餌に埋め込むこと。」

この改定は、旧来の「2本のフックは……充分に離しておくこと」という記述をより具体的にして欲しいという釣り業界からの要請に対応したもので、これによってあいまいさがなくなり、ファウルフッキング(スレ掛け)の可能性も低減し、記録の正当性と釣りにおける倫理がさらに高まることになるでしょう。



## タグ＆リリースデータを研究者へ提供

2024年9月2日、JGFA事務局にて、東京大学大学院 農学生命科学研究科 水圏生物科学専攻博士課程に在籍される高井万葉さんから、タグ＆リリース活動やそのデータ活用について要請がありましたので、スズキ・クロダイ・ヒラズキ・シイラ・ブリ・カンパチの再捕データを提供しました。対応者は釣魚保全委員会委員長の猶原正和、専務理事の東知憲、事務局の井上拓也です。

釣りの愛好者でもある高井さんは、「スズキに河川回遊をもたらす駆動力と成長に関する研究」を主たるテーマとしており、JGFAが1985年から実施しているタグ＆リリース活動とそのデータに着目していただきました。以前からこの活動はご存知だったそうです。

「ここには、簡単には収集できない量のデータが蓄積されていると思います。適切に解析することで、スズキの成長やその年代変化について明らかにできるのではないかと考えています。JGFA様や釣り人の皆様が収集されたデータを最大限活用し、科学的な知見が得られたら大変嬉しく思います。」と話されました。スズキ含め上記6種類の再捕情報を提供された高井さんは、国際学術誌への投稿に向けて論文原

稿を作成しているとのことです。釣果が科学的価値を持つようになる、タグ＆リリース活動。JGFAはこのデータをさらに有意義に活用していきたいと考えています。ご興味のある方はご連絡ください。



釣り、魚、ご自分の研究など、自然を愛する気持ちを同じくするものとして話がはずみました

# 第40回 東京ベイ・シーバス・ゲームフェスティバル

## 報告:東京ベイ・シーバス・ゲームフェスティバル事務局

開催日:2024年11月10日(日)

会場:神奈川県横浜・新山下

RE:JOURNAL(釣り場は東京湾一帯)

主催:東京ベイ・シーバス・ゲームフェスティバル実行委員会

後援:ジャパンゲームフィッシュ協会(JGFA)

ルール:IGFAルール、オールタグ&リリース、バープレスフック採用。又長をポイント換算

参加チーム:14チーム

参加選手61名(ゲスト含む)



今年度40回フェスティバルも昨年同様、横浜・新山下RE:JOURNALさんをお借りして、14チーム総勢61名のシーバスアングラーが集まってくれました！ 久々にお互い顔を合わせ、充実した一日を過ごせました。

1985年にスタートを切り、JGFAタグ&リリースプログラムの一環としてスタートした東京ベイシーバスゲームフェスティバルは、記念すべき40周年となりました。参加者の皆様のおかげで合計10003尾をタグ&リリースすることができ、貴重なデータを管理・保管できております。JGFAには、各研究機関より参考データとして使用したいとの申し入れが来ており、実行委員会も喜ばしく思っております。

当フェスティバルの趣旨にご賛同いただいているご協賛各社様なくしては、40周年を迎えることはできなかつたでしょう。心より御礼申し上げます。また、これまで無事故で開催することができたのは各キャブテンのおかげです。参加者の皆さんは次世代に向けてシーバスフィッシングを残していただける最高のアングラー、オピニオンリーダーです。

新しいアングラーも増えてきてきました。これからもずっとシーバスゲームが楽しめるように、ご理解ご協力のほどをよろしくお願ひいたします。次年度、東京ベイシーバスゲームフェスティバルは新たなこころみのもと、スタートいたします！



## 第40回 東京ベイ・シーバス・ゲームフェスティバル

表彰結果 <開催日:2024年11月10日>

主催:東京ベイ・シーバス・ゲームフェスティバル実行委員会 ■天候:曇り一時雨 ■風向:北 ■水色:薄濁り~澄						
■チーム数:14 参加ボート(ガイドボート含む)14隻 ■選手数:61名(ゲスト含む)						
長さ:又長(下クチビル先端~尾ビレ末端中央凹みまで)						
表彰部門	順位	チーム名	選手(船長)名	ポイント	ボート(ガイド)名	ボートキャブテン
チーム賞	1	チーム鯉虎		379.5	ストライカー	早川 昌和
//	2	チーム チバ		332.5	シークロ	岡本 慶一郎
//	3	アップバーズ		315	JAWS	伊藤 伸生
船長賞	1	チーム鯉虎	早川 昌和		ストライカー	
	2	チーム チバ	岡本 慶一郎		シークロ	
	3	アップバーズ	伊藤 伸生		JAWS	
フルタグ賞	1	レッドヘッターズ(A)			シーマン	金子 茂
	1	アップバーズ			JAWS	伊藤 伸生
ルアーディ物賞	1	サバロシャローランナー	猶原 正和	84	いざなみ	岩谷 大輔
フライ大物賞	1	レッドヘッターズフライチーム	高井 雄一	67	シークロ	伊藤 義明
レディース大物賞	1	レッドヘッターズ(A)	田村 浩子	56.5	シーマン	金子 茂
ジュニア大物賞	1	RKFC	井田 宗司	34	アンリミテッド	
シニア大物賞	1	チーム チバ	小金井 俊和	80.5	シークロ	岡本 慶一郎
再捕特別賞	1	該当者なし				
※チーム賞同率ポイントの場合は最大又長が大きいものを上位とする。						
■タグ&リリース合計尾数:130尾						

# JGFA沖釣りサーキット

沖釣りもIGFAルールで、という故服部善郎名人（JGFA名誉会員）の呼びかけで2005年から始まったJGFA沖釣りサーキット。前回のヒラメ大会は台風の影響であえなく中止。最終戦、今年の締めくくりはシーズン突入のカワハギ大会！いつもお世話になっている神奈川県三浦市小網代の「丸十丸」まで開催。IGFAルールやバグリミットを守りながら、総勢17名が釣り日和の中、釣りを楽しみました。

## 【大会要項】

- ▼開催日：2024年11月17日(日) 出船7:30 沖上がり13:00
- ▼場所：神奈川県三浦市小網代「丸十丸」
- ▼審査：全長18cm以上のカワハギ3尾までの総重量(同重量の場合  
は年齢が高い人優位)
- ▼ルール：IGFAルールに準ずる(電動リール、クッションゴム不可。  
ハリ数は2本までなど)
- ▼バグリミット：全長18cm以上のカワハギ、他魚種含め10尾まで  
(何尾釣ってもかまいませんが、持ち帰りはバグリミットを厳守)
- ▼参加人数：17人

## 【当日の概況】

事前の天気予報では雨マークがちらほら…。しかし当日は薄曇りに時折日差しが入り、気温も24°Cまで上がりばかばか陽気に。風もなく遠くに富士山も見え、釣り日和となりました。小網代沖水深10m~40m附近を探り、ベテラン船長さんの案内でカワハギを探します。「こっちも魚探すの必死ですよ(笑)」そんな本音を聞きながら思い思いに釣りを工夫します。ボトムからやや浮かせた中層で良型を狙ったり、誘いを工夫して本日のパターンを探ったり、おもりやエサを工夫したりと。肝心の釣果は、竿頭はバグリミットいっぱいの10尾、その次は8尾と好調な結果に！サイズも30cm近い良型も交じり船内で歓声も聞こえてきました。全員安打とはなりませんでしたが、それでもまたやりたいと思える楽しい釣行になったのではないでしょうか。

- |         |        |
|---------|--------|
| 1位 浅野和也 | 0.90kg |
| 2位 舟橋夢人 | 0.80kg |
| 3位 亀岡昇  | 0.75kg |

2024年のJGFA沖釣りサーキットはこれにて終了。アマダイ大会からカワハギ大会まで計5戦が計画され、ヒラメ大会は残念ながら台風の影響で中止となりましたが、その他4戦が開催されました。参加いただいた皆さま、IGFAルールやバグリミットにご協力頂きまして誠にありがとうございました。次年度もどうぞ宜しくお願い致します。

## 2024【JGFA沖釣りサーキット】最終順位

順位	選手名	所属	1/28アマダイ	2/25タチウオ	5/26マゴチ	9/1ヒラメ(中止)	11/17カワハギ	合計ポイント
1	平澤貞三	個人会員	11	11	7	-	3	32
2	亀岡昇	個人会員	1	8	11	-	9	29
3	舟橋夢人	個人会員	9	1	4	-	10	24
4	福永雄海	横浜ビルフィッシュC	1	9	10	-	1	21
4	古宮武	マーメイドAC	6	10	1	-	4	21
6	浅野和也	マーメイドAC	5	2	1	-	11	19
7	下留憲政	個人会員	1	6	1	-	8	16
8	浅野法子	ファミリー会員	1	5	8	-	-	14
9	浅野俊吾	ファミリー会員	10	1	1	-	-	12
10	佐々木愛	横浜ビルフィッシュC	1	-	9	-	-	10

# 最終戦&総合結果発表

## 【対象となった大会】

- ・第1戦アマダイ大会 1月28日(日) 神奈川県・平塚・庄三郎丸
- ・第2戦タチウオ大会 2月25日(日) 神奈川県・川崎・中山丸
- ・第3戦マゴチ大会 5月26日(日) 神奈川県・金沢八景・一之瀬丸
- ・第4戦ヒラメ大会 9月1日(日) 千葉県・飯岡・隆正丸(台風で中止)
- ・第5戦カワハギ大会 11月17日(日) 神奈川県・小網代・丸十丸

★上位3名の方にはオリジナルトロフィーを、10位までの方には表彰状とJGFAオリジナルメジャータオルを授与いたします。また表彰状授与のセレモニーを2025年5月11日(日)開催予定の「JGFAフィッシングキャンプ」にて行います。



# ダイビングと釣り、生物多様性と博物館

瀬能宏さんは、神奈川県立生命の星・地球博物館に学芸員として長年勤められ、今年春に定年退職された研究者です。4月からは同館の名誉館員になられました。ジャパンゲームフィッシュ協会の記録認定業務において、魚種判定に困って問い合わせれば、明快なお答えが返ってくるという、たいへん頼もしい存在でした。いまはすこしスローダウンしながら、水辺の環境保全や生物多様性の解明に貢献を続ける瀬能博士に、博物館でお話を伺いました。



ジャパンゲームフィッシュ協会（以下**JG**）：魚の分類や同定に関しては、ほんとうにいつもお世話になっております。大変失礼ながら、こちらの博物館を訪問するのは初めてなんです。小田原から早川沿いに、芦ノ湖へと上がっていく登り口にあるんですね。

瀬能宏（以下**HS**）：私が勤務していた「生命の星・地球博物館」は自然史系の県立博物館です。もともとは自然史科学と人文科学の両方の機能を持つ総合博物館が横浜にあったのですが、そこから分離独立する形でここ小田原市に作られたんです。開館は1995年ですね。

**JG**：先任の若林務さんは、とくによくご連絡させていただきました。インターナショナル・ゲームフィッシュ協会は米国自然史博物館に源がありまして、そこに研究者と釣り人が集つてできた組織で

す。ジャパンゲームフィッシュ協会は、その友好団体という立場で、アマチュアの視点から魚の保全、将来につなげられる釣りのあり方、記録管理などを行っています。

**HS**：私は日本魚類学会に所属していて、1970年代から研究活動や学会運営に取り組んできました。2001年のことですが、ブラックバス問題がきっかけになって学会に「自然保護委員会」が組織され、私は副委員長に就任しました。日本の在来生態系に深刻な影響を与えていたブラックバスを排除しようという立場です。じつは、私は若林さんと直接会ってお話ししたことはないんですが、日本でいしょにブラックバスをきちんと研究した人で、基本的にはバス釣りの愛好者だと理解していました。つまり私たちとは立場が異なり、端的に言えば敵対関係にあったと思っていました。ですから、ジャパンゲームフィッシュ協会というところに移られ、いしょに魚の同定を依頼されたときは「あれ？あの若林さん？」と思いました。

**JG**：そうですよね。

**HS**：私のほうから問い合わせの電話をかけたんじゃなかったですかね。それでお仕事の内容を伺つてみると、ブラックバスとは関係がなく、記録管理や釣魚全般の保全ということで、後からだんだんと、協会のお仕事が分かつてきただい感じです。1990年代以降に淡水魚の多様性が著しく低下してしまった原因には間違いなくブラックバスやブルーギルの影響があると思っていますが、実はそれ以前の高度経済成長期に起こつた

水質汚濁や環境の消失・劣化も生物多様性の低下の大きな原因になりましたし、最近ではネオニコチノイド系農薬の問題も深刻化しています。ただ、人間が自分たちの意思によって止められるもの、たとえば農薬なら使用できない種類を法で規制することで効果が期待できますが、外来魚は強い法律で規制したからなくなる、というものではありませんのでね。わたしも釣りをしますが、釣りをやっている人たちの印象は、ブラックバスの問題もあり、必ずしもよくなかったんです。もちろん最近では博物館の活動に理解を示してくれる釣り人もおられて印象がかなり変わりました。

**JG**：お立場よくわかります。

**HS**：そもそも博物館がなにをするところかといえば、標本などのモノを集めて、集めたモノを研究して、その成果を展示や教育活動を通じて一般の方々に還元するという3段階になっているんです。「集める・調べる・伝える」と言い換ても良いかもしれません。なので博物館活動の基礎はモノ集めなんですが、小田原に移転するまえは魚を専門とする学芸員がいませんでした。つまり、ゼロからのスタートということで私は採用されたわけです。あこがれの博物館に採用されて夢を膨らませていたときのことですが、先輩の学芸員から「魚は問い合わせがあまりないからラクだよ」と言われました（笑）。この真意は好きな研究に時間を割けるということなんですね。魚は昆虫や植物、岩石・鉱物と違って博物館との縁があまりない分野だったんです。例えば夏休みの自由研究で魚の標本を作つてくる小学生ってほぼいないです。生で置いておけばすぐ腐りますし、乾かすと干からびてしまうし、標本にするには劇毒物のホルマリンが必要になる。これ、よく考えたら、市民との接点が少ない魚の学芸員は要らないってことになっちゃうんですよ。

**JG**：でも実際は、問い合わせが少ないなんてことはなかった。

**HS**：博物館に就職する前は、静岡県伊東市にある伊豆海洋公園でダイビング事業をやっていた益田海洋プロダクションの社員として3年半くらい仕事をしていたので、たくさんのダイバーやダイ



奄美大島での調査。水の世界に入るため、スクーバはお手のもの

ビングサービスの人たちと深いつながりができていました。それで博物館に転職してからも、海で魚の写真を撮ったダイバーから種類の問い合わせがどんどん入ってくる。一般の人たちとの接点が少ないところではなかったんです。また同時にただ問い合わせに回答するだけではもったいないなあと思いました。と言うのは、送られてくるたくさんの写真をデータベース化すれば標本と同じように機能させることができるからです。博物館の設立準備室で「画像も扱えるデータベースソフトを開発するから、チームに入ってください」と言われて、これはラッキーだと思い、ダイバーに呼びかけて写真を集めようになりました。もちろん標本の収集もやりつつです。

**JG:**画像を扱えるデータベースの構築は、瀬能さんのアイディアとは別個に、すでに構想があったわけですか？

**HS:**そうです。しかし当時、魚以外の分野では、画像を集めようという考え方はしていました。標本は実物であつ

て一次資料であり、画像は標本を写したものなので付属的なもの、つまり二次資料として捉えられていたからです。しかし画像は被写体が同定できて、撮影場所や撮影日がありますから、標本に置き換えることができます。つまり、標本と同じ一次資料として機能させることができます。さらに、魚の場合は標本では残せない「色彩」を記録するという重要な機能もあります。博物館でデータベースの構築を始めたばかりの頃は、各地で水中写真を撮影するダイバーたちとのつながりを活用していました。魚を学術的な対象としてみている一般市民は、おもにダイバーだったんです。当時「フィッシュウォッチング」という言葉が生まれ、ダイビングの目的が生物の観察へと移っていたんですね。

**JG:**言われてみれば、いまダイビングといえば自然観察というイメージしかありませんね。

**HS:**以前は違いましたよ。スクーバ(自給式水中呼吸装置)が導入された当



奄美の漁港にて。宿ではデータの整理、標本の作成などの作業が待っている

初、ダイビングはある意味冒険でした。でも危なくって誰もが楽しめるものではなかった。それでスポーツダイビングのほうにシフトして、泳ぐスピードを競うとか、水中重量挙げみたいな競技が行われました。でも苦しいことや辛いことは広くは行き渡りません。それでより多くの人が楽しめるレジャーダイビングに変わってきたんです。ただ、単にダイビングするだけではいずれ飽きてしまう人も多くいました。そのなかで、生物の観察に目を向けると、とても奥深い世界が見えてくるし趣味としても長続きする。



滋賀県高島市を流れる水路での淡水魚採集。網にはナマズが入った

**JG:**その呼び方は、「バードウォッ칭」の延長線上に作られたものですか？

**HS:**ある水中プロカメラマンが雑誌インタビューで使ったのが最初だと言われています。それが一般に広まっていった。生物多様性という観点から魚を見ているのはダイバーたちということになります。当時の私の認識として、魚の飼育を楽しむアクアリストにとって水槽の中の魚は大事なペットです。死んだら標本にして送ってください、って依頼すると怒られてしまう。釣りをやっている人たちは、食べるためだったり大きさを競ったりすることが目的で、多様性には目が向くにくかったと思います。しかし近年はSNSでいろいろな情報や考え方方が広まるためか、生物多様性に関心を持つ釣り人と、博物館との接点が増えはじめていると感じています。

**JG:**私たち釣り人は、現物とやりとりしていますからね……。

**HS:**そうなんですよ。標本と写真の2本立てでやっていますが、主体は標本です。それがないと新種の発見にも貢献できませんし、初記録であっても標本がないと論文を受け付けてくれません。レジャーダイビングでは生き物に触ってはいけないと教わるんです。つまり博物館との関係は写真でしか築けない。でも釣りをやっている人たちは現物が手元にあるわけで、博物館とはとても相性がいい

いんです。

**JG:**話をとっても戻してしまうのですが、瀬能さんが魚好きになられたのは、ダイビングを始められてからのことなんですか？

**HS:**博物館の学芸員になるような人の大半は、物心ついたときから生き物好きだと思います。私は虫からスタートして、蜘蛛に凝って、化石を掘ったりもしました。父親の影響で釣りは小さい頃から好きだったんですが、高校になると同好の友達もでき、ときには学校をサボって釣りに行ったりしました。大学は近畿大学に進学し、いろんな意味で人生の転換点になりましたね。先輩に研究を仕事にしたいと思っている人がいて、いっしょに西表島や石垣島に調査に出かけました。どこから資金が出るわけでもなく、アルバイトと親からの援助を合わせて自費で行き、結果をまとめて発表しました。それによって研究の世界がどういうものか、具体的に理解できるようになりました。ただ当時の近大は「水産」という実学的な観点がとても強く、私がやりたかった魚類の分類なんて研究はできませんでした。

**JG:**養殖の近大マグロに代表されるような、経済的に生産性のある研究ですね。

**HS:**私が学生の頃から、クロマグロはいけすの中で勝手に産卵していました。研

究所ではそれをどうやって回収して育てればよいのかということを研究していましたね。そしてそもそもなんですが、当時近大に大学院がありませんでした。どうしようかなと思っていて、世界的に活躍している琉球大学の先生に相談したら「歓迎します」といわれたので修士課程はそこに進学し、日本産のボラ科魚類の分類をテーマに理学修士号を取りました。ところが当時の地方大学には博士課程がなかったんです。それで、さて次はと思って魚の分類ができる博士課程のある大学を探すと、旧帝大、つまり北大と京大くらいしかないし、また修士課程からやりなおしてくださいなんて言われて。

**JG:**そんなものなんですか？

**HS:**こっちは、いろいろあって琉球大の院に入るのに一浪していますし、修士課程の途中で魚の誘惑に負けてタイの大大学に半年ほど留学していたこともあるし、修士課程が終わっても大学に1年残っていましたから、普通の人よりも3年余分に時間を使ってしまったことがあります。なのでまた修士からやりなおすのはいくらなんでもイヤだと思っていたら、東大だけは他大学からの博士課程への編入を推奨はじめっていました。それが幸いして、わりと簡単に編入させてもらい、東京のど真ん中にあった海洋研究所に通うようになったんです。関西から沖縄、そして関東と、転々としましたね。

**JG:**博士号を取られてからダイビング会社に就職されたというのは、また大ジャンプだと思うのですが、そのあたりの経緯はどんなものですか？

**HS:**琉球大学に進学してすぐのことなんですが、指導教官の先生に「東京に益田一(はじめ)さんという魚にとても詳しい人がいます。益田さんと『日本産魚類大図鑑』という、日本の魚を網羅する図鑑を作る計画があって、益田さんが近々採集と撮影に来るから、きみ案内役をお願いします」と言われました。修士の研究テーマではなく、まず図鑑作りに関わることになったんですよ(笑)。益田さんは沖縄だけでなく九州もいっしょにぐるっと回ったりして、親しくなりました。修士論文の材料も、そのついでに集めまし



九州での淡水魚採集。ヤリタナゴを釣りで集める

た。益田さんは「益田海洋プロダクション」の社長で、伊豆海洋公園のダイビング事業を請け負っておられました。財閥の創業者の家系で、ご自宅や事務所に出入りされていた方には誰でも知ってる大企業の会長さんとか著名な芸能人だとか面白い人が多かったです。東大で博士号を取った後、1年ほどいわゆるボスドクをやっていたんですが、その後どうやって飯を食っていこうかと思っていたところ、益田さんと食事をする機会があつて現状を話したら、あっさり「うちに来れば?」と、1分くらいで就職活動は終わってしまいました。

**JG:**ダイビングはそれから習得されたんですか?

**HS:**そうですね。大学院を通じてマスクとシュノーケル、フインだけを使うスキンダイビングをやっていました。しかし益田さんの会社に就職してスクーバダイビングを教えてもらってからは視野も広がりました。潜れば必ず新しいテーマが拾える、という感じすらありましたよ。当時、私にとっての釣りは、楽しむというよりは研究材料を捕まえるための手段でした。目の前に珍しい魚がいるとしましょう。警戒心が強くて、近づくとピッと逃げてしまう。網やモリでは取れないけれど、釣りでは取れることがあるんです。

**JG:**釣り師ならではの工夫(笑)。

**HS:**西表にタメトモハゼっていう大きな

ハゼがいるんですが、とっても逃げ足が早いんです。まわりは藪で投網は使えない。なんとか大きなものを取るために置きバリだな……と思いついて、突き出した枝から仕掛けを垂らしておきました。しばらく置いておくと、じゃんじゃんかかる。枝が揺れればかかった合図で回収です。夜に浅場に出てくるジャノメハゼっていうのも採集しにくいですが、懐中電灯の光のへりで魚が驚かないように探して、いたら魚の目の前に陸から餌を振り込むという釣り方で採りました。オドリハゼの話もおもしろいですよ。

**JG:**ハゼ釣りの話、多いですね……

**HS:**石垣島の米原っていうところで初めて見つけたんですが、警戒心が強くて、すぐ穴に入っちゃう魚です。小さいから、なかなかハリがない。持っているハリは袖型のもので、ちょっと大きすぎて、そのままでは口に入らないので、ペンチでキュッと絞って使いました。水面に浮かびながら短い竿で釣るんですが、サンゴ礁ってエサ取りは無数にいますし、オドリハゼのいる場所が水深3メートルほどで、しかも上からは直接見えないオーバーハングの下なので悪戦苦闘です。でもようやく1匹かけて、水中から引き上げてきたら、水中では5、6センチあるかなと思って寄せてくるとキューっと小さくなってきて、実際は3センチくらい。

**JG:**それは、タナゴバリでもかかりにくいですね。

**HS:**当時はまだ日本から記録のないハゼでしたし、釣れた時の興奮は今でも忘れられません。のちの研究で新種と判明しましたから、学名を付けるところまでかかわることができました。

**JG:**ハゼ系の魚への愛はなぜに?

**HS:**ハゼの仲間は海の魚の中で多様性がもっとも高いグループと言われています。調査に行けば、新種や初記録種が取れる可能性も高く、集めるのが面白いんです。さまざまな環境に適応しているので、自分が蓄積してきた採集スキルを試すことができます。

**JG:**それはどういうことでしょうか?

**HS:**穴が1つ、海底の岩に空いているとするでしょう。この時、穴の下側、壁面、天井、奥でそれぞれ別の種が棲み分けている可能性があります。ハゼが生息していると思われる環境を細かく分解して見ることで「新種はこんな場所にいるんじゃないのか?」と予想を立てることができます。同じ環境で同じ採集方法を繰り返しても同じ種しか取れません。誰もが気づくような場所では、すでに誰かが先に取っている可能性が高いです。視点を変えることができれば成果として返ってくるので、ハゼの仲間はおもしろいんです。運に左右されない。

**JG:**そんな小規模の棲み分けなど、水上にいる私たちには想像もつかないんですね。

**HS:**釣りの世界にも、いろんな種類を釣りたいと思っている人がごく少数いらっしゃって、みんながこれまで釣ったことがない場所で特殊な仕掛け、たとえば小さなハリを深い場所に下ろして釣るなど、やっていらっしゃいますね。まだダイビングにおける画像ほどではないですが、釣りの方から提供された魚の中にも新しい発見があり、大きな成果が出つつあるところです。インターネット上のWeb魚図鑑も、私たちとやっていることは似ていて、有志でやるか公的機関でやるかの違いですが、楽しみの世界でやっていらっしゃることを公的機関と連携できれば、学問への貢献という意味で広がりが出てくると思っています。JGFAでは、魚の釣獲記録だけでなく、



博物館の作業室にて

証拠となった写真をいつしょに登録できるデータベースの構築はできていないのでしょうか？

**JG:**日本記録データベースはあるのですが、写真をそれといっしょに引っ張つて来るというところまでは行っていません。

**HS:**そうですか。画像データベースのお話は最初にしましたが、まともに仕事になりだしたのはこの十数年のことです。その前は動かないソフトウェアとの格闘、それでも無理やりやってきました。大学でも博物館でも、標本を集めて管理し、使えるようにするというのはそれだけで大仕事です。では写真だったら簡単にできるのか、というとそんなことはなく、まったく同じ手間がかかります。データベースとして使えるようにするには、同定情報や位置情報などさまざまな項目を入力し、かつ画像の画質を調整し、大きさや解像度も揃えて登録する必要があります。昔の博物館では標本を登録するだけで済んでいましたが、写真もということになると、単純に仕事量は2倍になるんです。昔は1日10時間働けば良かったとすると、写真を扱い始めると20時間必要になるという計算。

**JG:**人を増やすか、自分がムリをするしかなかった、ということですか。

**HS:**私に関して言えば、あの手この手を使いつつも、若いうちの力に任せてやつてきたから今があると思っています。データベース化っていうと、簡単にできるようなイメージがあるかも知れませんが、実用レベルに持っていくと思うとそうではありません。人工知能の力を借りれば将来的に改善するかも知れません

けれど、正確な同定情報も含めて、学術的にも一般の利用にも耐える使い勝手のよいデータベースの構築は難しいのではないかと思っています。

**JG:**私達の協会でも、日本記録、世界記録申請の用紙にあるアイテム数はかなりのものです。釣り具や仕掛けに関する情報が多いですが……。

**HS:**そう、同じことですね。申請者から上がってきたものを右から左に入力すると、オリジナルに記入ミスがあつたりするでしょう？ また、表記に統一が取れていなかつたり。統一が取れていないと、キーワード検索に工夫が必要になり、それだけでストレスです。場所の表記ひとつとっても国、都道府県、都市区町村、その他（字名など）があり、それらとは別に自然地形である湾や半島の名前、川の名前、淵や根の名前などの地域名があって、さらにそれぞれに日本語とローマ字での入力が必要になります。伊豆大島（あるいは大島）のローマ字表記だけでもIzu-Oshima I.とするかIzu-oshima I.とするのか、さらにI.と略すかIslandとスペルアウトするのかなど、何種類もの表記がありますし、ローマ字には訓令式やヘボン式、さらにそれらを折衷した表記法もあります。座標も十進法と六十進法があって、魚の論文では後者を使うのが普通なんですが、気の利かないソフトだとどちらか一方しか入力できず、必要に応じて換算が必要になったり。

**JG:**膨大な作業が想像できます。1年間に平均してどれくらいの標本や資料を登録していたんですか？

**HS:**そうですね、近年であれば標本だ

けで年間3～4千点、画像は1万点くらいです。実用に耐えるシステムにするためには何段階ものステップがあって、相当なエネルギーが必要ですが、それが結果として実用性につながるんです。1人の力では到底不可能ですから、あの手この手で人とのかかわりを作っていくことが大事ですね。アナログな部分にかける労力は、筆舌に尽くしがたいものがあります。私の場合、休みはあってないようなものでした。

**JG:**推測しかできませんが、ありがとうございます。この博物館が保有しているデータは、外部からも問い合わせをすればアクセス可能なのでしょうか？

**HS:**ウェブ上に公開しています（神奈川県立生命の星・地球博物館 収蔵資料データベース 魚類写真 [https://nh.kanagawa-museum.jp/kpmnh-collections/search?cls=dummy\\_media\\_attfs](https://nh.kanagawa-museum.jp/kpmnh-collections/search?cls=dummy_media_attfs)）。生物に関しては保全の問題があるので、採集した場所の情報などに制限をかけたりはしていますが、約30万点の画像に誰でもアクセスできます。

**JG:**協会からもひんぱんにお問い合わせや同定の依頼をしていたと思うのですが、その手の依頼対応は業務の一環だったんですか？

**HS:**はい、博物館の仕事の中には「レファレンス」というものがあり、図書館の仕事にならった呼び方なんですが、いわゆるお問い合わせ対応ですね。このインタビューにお答えしているのも、レファレンス業務です（笑）。お問い合わせで写真が送られてくるのであれば、同定結果を返すだけでなく、写真のデータベース登録をお願いしていました。

**JG:**なるほど。それによってデータが積み上げられていくならば、お互いのためによいですね。話は変わって私達の活動範囲に密着した話なんですが、研究者、博物館の学芸員としてのお立場から、これから釣りはどうあるべきだと思われますか？

**HS:**釣りの種類や方法によるでしょうね。岸から、あるいは船に乗って近場の海で釣る場合、釣獲圧を考慮する必要があると思います。海に放流した魚の大半が、漁師さんが捕るまえに遊漁で釣られてしまうとか、具体的なデータはない



このオンドンザメなど、大物を撮影するには脚立などを活用



ワニゴチの撮影

ですが肌感覚ではあります。しかし何より私たちが問題視していく、すこし前にも学会のシンポジウムをやったテーマが、「釣り場作りのための放流」です。淡水魚のタナゴなんかはひどい状態です。

**JG:**えっ? どういうことですか。淡水魚のタナゴはJGFAが日本記録を認定する対象ではないのですが、知り合いにもその釣りの愛好者は多いです。

**HS:**いろんなタナゴを釣りに都合の良い場所に持ってきて放流し、増やして釣って楽しむということが行われているようです。いなかつたものを放すというのは国内外外来種を作り出す行為なのでよろしくないです、もっと困るのは、減ってしまった在来種がいる場所に、同じ種類を外から持ってきて補強し、また釣れるようにする行為です。交雑による遺伝子汚染が起きてしまうからです。遺伝子研究が進むと、同種の魚でも地域ごとにすこしづつ違うということがわかつてきました。同じヤリタナゴでも、地域ごとに

遺伝的なバリエーションがあるわけです。それを無視して放流すると、多様性が損なわれてしましますし、その放流が自分たちの都合だけで行われているというのが大問題なんです。

**JG:**生物の移動は、私たちがかつて想像もできなかったような経路も発生してきていますしね。

**HS:**人為を介して本来の分布域外に入ってくる生物種は、意図的・非意図的を問わず外来種と定義されています。想像もできない経路と言えば、船のバラスト水に紛れ込んでしまう生物がありますね。オーストラリアに日本のハゼやスズキが運ばれて定着したり、カリ福ルニアやアラビア海にも日本のハゼが運ばれてしまったり。ハゼってけっこうバラスト水に取り込まれやすいみたいなんです。原因がわかったので今ではバラスト水を消毒することで非意図的な外来種が生み出されることを防いでいます。タナゴの話に戻ると、淡水魚の場合は人が意図的に持っていないかぎり、ぜつ

たいに移動はしないでしょう。釣りと環境保全との関係には、資源に対する釣獲圧や乱獲の問題と、生物の歴史を破壊してしまうような放流との問題が混在していると思います。生物の歴史を破壊してしまう象徴的な存在がブラックバスでした。意図的なものであるならば、釣り人側から意識を変えていかないと、釣りと環境保全とは相容れなくなります。無知や善意に基づく放流であれば改善の余地はあると思いますが、自分さえよければいいというエゴ的なもの、果ては悪意を持った放流なども見受けられますから、対応には苦慮しています。私たちもそれらの深刻さを折に触れて発信はしているのですが、伝わりきれない感じがします。

**JG:**それは、私たちにとっても大きなテーマです。ちなみに、市民の皆さんとのコンタクト、たとえば問い合わせの件数は年間どれくらいあったんでしょうか?

**HS:**平均すると、魚関係はのべ千人くら



岡山にて、昆虫採集のお手伝い

いでしょうか。同定依頼だけではなく、ありとあらゆるお問い合わせです。同定点数は、多い年には六千点くらい、少ない年でも二千点近くはありましたね。

**JG:**魚種の同定依頼をした場合、瀬能さんは「〇〇です」と言い切っていただけるんですが、その根拠は経験ですか、それとも利用できるデータの量ですか？

**HS:**私のポリシーです。研究者の中にはぜったいに断言しない人もいますし、アカデミズムに徹している人ほど、明確なことは言わない傾向があります。数学や物理学などと違って、自然史科学の研究で100%確実な答えがでることはありえないんです。出した結論はすべて仮説で、歴史的に何度も検証されていく。研究者の立場から「××と思われます」と言ったのに、たとえばテレビの報道では断言的に変更されてしまったと怒る人もいるんですが、私たちが提示できるのはあくまで仮説だという理解があれば、口調は断言的でいいと思っているんです。もちろん背景に手持ちの膨大なデータや積み重ねてきた経験値があることは言うまでもありません。

**JG:**博物館がある、このあたりの川の環境はどうですか？ つい魚関係のことを聞きたくて。

**HS:**魚があまりいないです。ある特定の魚種にしか興味がないと、この変化の深刻さが見えないとは思いますが、種類

も数も減っています。景観はいいですよ。この酒匂川水系は湧水も豊富で、きれいな水がさーっと流れ、水草も茂っていて、外から見るととっても良い感じですが、カラッポです。

**JG:**カラッポですか……私は毛鉤でマスなどを釣るんですが、かつては時間がくるとカゲロウやトビケラなんかが猛烈に羽化して流れ、魚がそれを食べる。しかしこの10年くらいで日本全国、あきらかに水生昆虫の羽化量が減ってきている実感があり、渓流魚も釣れなくなってきた。良くなったところは知りません。

**HS:**周辺に畑や水田があれば、農薬のせいですね。日本の大抵の川には周辺に耕作地があって、そこで撒いた農薬が川に流入してくる。もちろん薄まってはいるんですが、影響はあります。一時期アカトンボが減ったと騒がれましたが、調べたらネオニコチノイド系の農薬のせいでした。ミツバチが消えたというのも、伝染病とかではなく同じネオニコの影響というのがわかつきました、虫を殺すのが農薬のねらいですからね。消えたのが虫なので、環境への影響の深刻さが市民の方々に伝わりにくいのですが、よくこれで騒ぎにならないな、と思うくらい川に生き物がいないです。魚が死んで浮かんだら、大ニュースになるでしょう？ でも、それと似たような状態が川の中で起

きているんです。昔は、農薬を撒いたら水田に警告の赤旗がたつものでした。水路や水田の中にはたくさんのカエルがひっくり返っているし、用水路の堰から上には死んだ大量の魚が真っ白に浮かんでいました。それを毎年繰り返していました。つまり、毎年それだけ死んでいても、ちゃんと復活していたということです。

**JG:**どっかに、少数でも生き残るすきまが残っていた。

**HS:**でも今はそんなことはなくて、昆虫だけに絶大な効果を発揮する農薬なんです。

**JG:**目立たないだけに悪いともいえますね。

**HS:**水生昆虫が激減した結果として、虫を食べている魚たちも減ったと考えています。生まれたてのヤゴとか、ミジンコのレベルのサイズでも効きますから、それを餌にするような生き物も減っているんじゃないかなと思います。

**JG:**深刻ですね。私たちも、釣りをとりまく環境に関しての発信力を強化していくたいと思っています。いま「名譽館員」になられて、お仕事の流れは以前と変わってきたのでしょうか？

**HS:**雇用関係もなければ席もないのですがやり残したことがたくさんあります。私がかかるわないと進まない標本整理を後任に押しつけるわけにはいきませんので、週に1日か2日は博物館で仕事をしています。自費で購入した資料も博物館に寄贈していますので、調べ物があれば博物館に行く必要があります。書き物とかメールの返信などは家でもできますが、勤務していた頃とは違う健康的なリズムでやっています(笑)。委員会への出席、大学での集中講義などは引き受けますし、遠隔地から招かれると嬉しいですね。この前も西表島でイベントがあり、講演で呼んでいただけました。まだやりたいことが残っていますから、よいペースを守って、健康に留意しながら活動していくことを思っています。

**JG:**ありがとうございます。魚や環境に関して、またいろいろと伺うことが出てくると思います、引き続きよろしくお願ひします。

# 釣りフェス2025に出展します



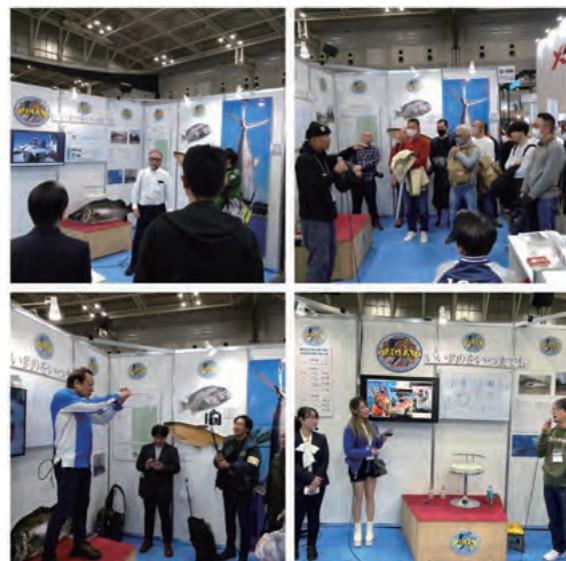
今年も、ジャパンゲームフィッシュ協会は「釣りフェス2025」に参加することとなりました。釣りフェスは、釣り愛好者や業界関係者が一堂に会する日本最大級の釣りイベントであり、2025年1月17日から19日までの3日間、パシフィコ横浜で開催されます。

今年は「名物!?ラインカットやめました」「JGFAを知つて・遊んで・お土産もらおう」ということで、ブース内には、2024年に認定された日本記録と世界記録になった魚と釣り人の紹介、実物大の魚パネルを使った自分との大きさ比べ、標識魚の採捕記録の掲示があります。また、リリースやIGFAルールの重要性を広く伝えるためのイベントの日程を発表し、アンケート&クイズに答えて釣りの知識を深めることができます。参加者にはステッカーなどのプレゼントをご用意しています。さらに、「にせかななすくい」コーナーを設けました(掬うのはソフトビニール製の玩具です)。お子様やご家族、どなたでも参加OKです。持ち帰り規制という概念や持続可能な釣りの方法を楽しく学べるこのコーナーでは、釣りの楽しさと環境保護の大切さを感じていただけます。ソフビの魚は、バグリミットを守ってお持ち帰りいただけます。

JGFAアンバサダーによるトークショー、会員の方にもご自身のこだわりとJGFAの活動内容が関係するテーマについて

語っていただける時間もご用意しました。(詳細はホームページをご確認ください!)

ブースは、退場・再入場口の目の前にありますので、ぜひお立ち寄りください。スタッフ一同、今年多くの皆様にお会いできることを楽しみにしています。



2024年の釣りフェス写真です!

# 国際カジキ釣り大会の日程決定!

世界的に「釣れる大会」として大きな注目を集め、本年は参加118チーム、2日間の開催で39尾のビルフィッシュを釣り上げた国際カジキ釣り大会(略称JIBT)の2025年日程が決定いたしました!

会場は例年通り静岡県下田市、梅雨明けと釣果が期待できる7月24日(木)~7月27日(日)の期間で開催されます。経験豊富なビルフィッシャーをはじめ、出場経験がない方も地元チャーター船を使用しエントリーできます。海原を自在に泳ぐカジキの壮麗なファイトに加え、仲間たちとの交流なども体験してください。

詳細は今後JGFAのホームページならびにJIBTの専用ページにアップされていきます。  
<https://jibt.jp/>

- ・7月24日(木)当日受付・前夜祭
- ・7月25日(金)競技1日目
- ・7月26日(土)競技2日目
- ・7月27日(日)競技3日目・表彰式



この瞬間のために!

# 東京都の海域でまき餌が使用可能に

2024年11月15日、長い間東京都海域で禁止となっていた「まき餌」使用がついに解禁となりました。科学的な根拠に基づかない規制に対し、釣り関係の諸団体から寄せられた要望が、この自由化につながったと言えるでしょう。

船釣りでは、まき餌カゴのサイズが島しょ部では長さ23cm太さ5.5cm(いわゆるLサイズ)まで、東京都内湾では長さ8cm太さ5cmまでとなっており、使用量も1人1日あたり島しょ部で9kg、東京都内湾では3kgまでとなっています。

陸釣りについてはまき餌の使用量は必要最小限の量とし、漁業権が設定されている区域にあっては漁業権者の漁場管理に協力しなければならないとされています。



## 釣りのルール(船釣り・陸釣り共通)

東京都漁業調整規則で遊漁者(釣り人など)の漁具・漁法が制限されているほか、漁業者の操業を妨げないよう配慮しなければならないと定められています。

## まき餌釣りに関するルール(東京海区漁業調整委員会\*指示によるもの)

まき餌カゴのサイズは、島しょ部では大きさは長さ23cm、太さ(外径)5.5cmまで(いわゆるLサイズまで)、東京内湾では長さ8cm、太さ(外径)5cmまで。使用量は一人一日あたり島しょ部では9kg、東京内湾では3kgまで。

## その他釣りに関するルール

### 以下の行為は東京海区漁業調整委員会指示で禁止されています！

- ・ 東京都海面においてひき縄釣り(トローリング)を東京海区漁業調整委員会の承認なく行うこと。
- ・ 伊豆諸島各島距岸から1,500m以内の範囲でいきえさ(餌虫類を除く)を用いてかさご、あかはたを釣ること。
- ・ 小笠原諸島海域において60トン以上の船舶を使用した遊漁もしくは遊漁の案内をすること。
- ・ 小笠原諸島距岸3海里以内の海域での10トン以上の船舶を使用した遊漁もしくは遊漁の案内をすること。

\*東京海区漁業調整委員会は、漁業法・地方自治法に基づき設置されている行政委員会であり、水産資源の管理や漁業と遊漁との調整などの役割も担っています。必要に応じて漁業・遊漁等の関係者に対し、水産動植物の採捕に関する制限や禁止等を内容とする指示をすることができます。遊漁を行うにあたっては指示の内容を遵守する必要があります。

## 各自治体の連絡先

漁業権の対象となっている水産動植物は、漁法にかかわらず、とることはできません。また、安全や資源保護などの理由から地域で定めたルールがあります。釣りに行くときは必ず釣りをする地域のルールを確認とともに、不明な点があれば下記連絡先にお問い合わせください。

東京都産業労働局 農林水産部水産課 漁業調整担当  
03-5000-7208



新島村役場 産業観光課 水産係  
04992-5-0284



東京都総務局 大島支庁産業課 水産担当  
04992-2-4486



神津島村役場 産業観光課  
04992-8-0011



大島町役場 産業課 水産商工係  
04992-2-1445



東京都総務局 三宅支庁産業課 水産担当  
04994-8-5017



利島村役場 産業観光課 (利島村勤労福祉会館 内)  
04992-9-0046



三宅村役場 観光産業課 農林水産係  
04994-5-0992

いずれにしても、安全の確保や釣りが終わったら釣り場のまき餌を洗い流す、ゴミは持ち帰るなどの基本的マナーを守ることが大事です。また三宅島、青ヶ島、母島など磯釣りにローカルルールを定めている島があり、それらのルールはジャパンゲームフィッシュ協会の提唱する自主的バグリミットの考え方と軌を同じくするものです。過剰な漁獲は釣りの将来を危うくします。解禁になったからといって膨大な量のまき餌が投入されると、海洋環境の悪化が懸念されます。市民常識と倫理感に基づく釣りの姿が求められています。



## 陸釣りのルール

### 釣りに関するルール・マナー

- ・漁業操業に支障をきたさないように注意してください。
- ・釣りが終わったら釣り場に残ったまき餌を洗い流すとともに、ゴミは必ず持ち帰ってください。
- ・立入禁止区域には入らないでください。天候や波浪など安全には十分気を付けて釣りを楽しんでください。

### まき餌釣りに関するルール(東京海区漁業調整委員会指示によるもの)

まき餌の使用量は必要最小限の量とし、漁業権が設定されている区域にあっては、漁業権者の漁場管理に協力しなければならない。

### 地元ルールの例

三宅島の磯釣りルール	青ヶ島の磯釣りルール	母島の磯釣りルール
イシガキダイ、イシダイ、メジナ類は全長40cm以下、その他食べない魚はすべてリリースとし、持ち帰りは一人2尾以内までとする。	全長40cm以下のイシダイ、イシガキダイについてはリリース	イシダイ、イシガキダイについて、5kg未満はすべてリリースすること。東京からの一航海（一往復）につき5kg以上のイシダイ又はイシガキダイのどちらか一人一尾のみキープできる。その他はリリースしなければならない。

御蔵島村役場 産業課 産業建設係  
04994-8-2121

東京都総務局 八丈支庁産業課 水産担当  
04996-2-1113

八丈町役場 産業観光課 水産商工係  
04996-2-1125

青ヶ島村役場 総務課 事業係  
04996-9-0111

東京都総務局 小笠原支庁産業課 水産担当  
04998-2-2105

小笠原村役場 産業観光課  
04998-2-3114

遊漁採捕量報告のお願い  
水産庁管理調整課 沿岸・遊漁室  
03-3502-7768



# NEW JAPAN RECORD GALLERY

WR =世界記録 CR =キャッチ&リリース TR =タグ&リリース AL =オールタックル・レンゲス記録 FAL =オールタックル・フライ・レンゲス記録 W =女性 J =ジュニア 記録

※アカメ、イトウなどの環境省レッドデータブック記載種は、リリース前提での記録申請受付となります。

※コクチバスなどの外来魚の申請は外来生物法の規定にそって受け付けます。外来生物法では規定していないキャッチ&リリースについては、各都道府県でこれを禁じている水域もあり、持ち出しを禁止しているケースもありますので、これらに従うことといたします(2016年7月5日JGFA理事会決定)。

※タイリクスズキに関しては、オールタックル部門および10ポンドシーバスクラブ、年間フィッシングコンテストの対象として申請を受け付けることになりました(2020年4月1日より)。

**お願い:記録申請時は、書類、紙焼き写真とともに高画質の写真データもご提出を!**  
大型魚のデータができるだけ正確に保存するためですので、ご協力をお願いいたします。メディアの形は問いません。

## OFF SHORE <船からの釣り>

### <ヒラマサ> YELLOWTAIL, California / *Seriola lalandi dorsalis*

●M-2kg(4lb)クラス ●1.04kg ●島根県浜田市沖 ●2024-7-27 ●田村 純一 ●レギュラー会員 ●田村丸

### <シイラ> DOLPHINFISH / *Coryphaena hippurus*

●M-60kg(130lb)クラス ●0.71kg ●島根県浜田市沖 ●2024-7-27 ●田村 純一 ●レギュラー会員 ●田村丸

### <クロダイ> PORGY, black / *Acanthopagrus schlegeli*

●W-8kg(16lb)クラス ●1.90kg ●神奈川県川崎市川崎区浮島沖 ●2024-9-8 ●中井 遥子 ●ファミリー会員 ●シークロ

W TR



田村 純一  
<ヒラマサ 1.04kg>  
リーダーを根に擦られて困りました



中井 遥子 <クロダイ 1.90kg>  
何度もドрагから糸が出て、竿もよくなり、ドキドキのファイトでした

## SHORE <岸(磯)からの釣り>

### <ドチザメ> SHARK, banded (hound) / *Triakis scyllium*

●M-24kg(50lb)クラス ●12.30kg ●神奈川県本牧海釣り施設 ●2013-12-21 ●奥山 文弥 ●フィッシュ&フィンズ

CR

### <ドチザメ> SHARK, banded (hound) / *Triakis scyllium*

●M-15kg(30lb)クラス ●12.65kg ●神奈川県本牧海釣り施設 ●2013-12-21 ●西野 勇馬 ●ファミリー会員

CR

### <イシダイ> PARROTPERCH, Japanese / *Oplegnathus fasciatus*

●M-4kg(8lb)クラス ●1.45kg ●大分県大分市大在坂ノ市沖 縦一文字 ●2024-9-21 ●財前 雄一郎 ●レギュラー会員

TR



西野 勇馬 <ドチザメ12.65kg>  
良型のドチザメが釣れているとの情報があり、そのタイミングで行った釣行でした。この日は複数釣れましたが最大サイズがこの個体です



財前 雄一郎 <イシダイ 1.45kg>  
黒鰐のヘチ釣りで一文字へ、この時期はイシダイも狙えます。前回ハリス切れのボイントで餌を落とすと「ガツン、ギューン」引きを十分に楽しんで慎重にタモ入れ「やったぜ!」大切にしたいですね、ポイントもそして魚も!

## FRESHWATER FISHING <淡水の釣り>

### <ソウギヨ> CARP, grass / *Ctenopharyngodon idella*

●M-60kg(130lb)クラス ●21.33kg ●埼玉県元荒川 ●2024/7/30 ●竹内 尚哉 ●レギュラー会員

CR

### <カラフトマス> SALMON, pink / *Oncorhynchus gorbuscha*

●M-1kg(2lb)クラス ●2.07kg ●北海道羅臼町 ●2024/7/20 ●前田 穢 ●レギュラー会員

### <ハクレン> CARP, silver / *Hypophthalmichthys molitrix*

●M-15kg(30lb)クラス ●10.80kg ●茨城県常陸利根川 ●2022-7-3 ●村田 倭 ●終身会員

CR

### <ハクレン> CARP, silver / *Hypophthalmichthys molitrix*

●M-10kg(20lb)クラス ●17.97kg ●茨城県利根川 ●2023-6-4 ●下畠 剣一郎 ●フィッシュ&フィンズ

CR

### <ハクレン> CARP, silver / *Hypophthalmichthys molitrix*

●M-6kg(12lb)クラス ●11.42kg ●埼玉県荒川 ●2024-8-21 ●竹内 尚哉 ●レギュラー会員

CR

### <アカメ> LATES, Japanese / *Lates japonicus*

●M-6kg(12lb)クラス ●16.95kg ●高知県浦戸湾 ●2024-8-31 ●由岐 直久 ●レギュラー会員

TR

### <アカメ> LATES, Japanese / *Lates japonicus*

●M-37kg(80lb)クラス ●34.40kg ●高知県浦戸湾 ●2024-8-31 ●由岐 直久 ●レギュラー会員

TR

### <ハクレン> CARP, silver / *Hypophthalmichthys molitrix*

●M-4kg(8lb)クラス ●10.10kg ●埼玉県荒川 ●2024-8-26 ●竹内 尚哉 ●レギュラー会員

CR

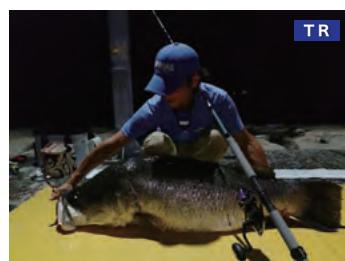
### <ハクレン> CARP, silver / *Hypophthalmichthys molitrix*

●M-24kg(50lb)クラス ●10.44kg ●埼玉県荒川 ●2024-9-19 ●竹内 尚哉 ●レギュラー会員

CR



前田 穢 <カラフトマス 2.07kg>  
ラインが海藻に巻かれないとヒヤヒヤしましたが、竿を高くしてどうにかかわしました



由岐 直久<アカメ 34.40kg>  
今シーズンはずっと記録狙いの仕掛けで望んでおりましたが、なかなか結果が出ずには苦労しました。感慨無量です



竹内 尚哉 <ハクレン 10.10kg>  
ライトタックルで釣りに行くと今度はバトルに苦戦、しかしこの魚が出てくれて、ついていました

## SALTWATER FLY FISHING <海水のフライフィッシング>

### <ドチザメ> SHARK, banded (hound) / *Triakis scyllium*

●M-8kg(16lb)クラス ●7.90kg ●千葉県富津沖 ●2014-5-31 ●斎藤 悅朗 ●鉄心倶楽部 ●オブセッション

### <ボラ> MULLET, striped / *Mugil cephalus cephalus*

●M-10kg(20lb)クラス ●2.66kg ●広島県太田川放水路 ●2024-7-28 ●田村 紘一 ●レギュラー会員

CR

### <ヒラマサ> YELLOWTAIL, California / *Seriola lalandi dorsalis*

●M-6kg(12lb)クラス ●0.90kg ●島根県浜田市沖 ●2024-8-4 ●田村 紘一 ●レギュラー会員 ●田村丸



斎藤 悅朗<ドチザメ 7.90kg>  
マゴチのフライフィッシング中、ボトムトレス中にヒットしました。フライロッドで釣ると、良く引いて面白かったです



## FRESHWATER FLY FISHING <淡水のフライフィッシング>

### <コウライニゴイ> BARBEL, steed / *Hemibarbus labeo*

●M-8kg(16lb)クラス ●1.90kg ●山口県岩国市小瀬川 ●2024/6/16 ●田村 純一 ●レギュラー会員

### <アマゴ(サツキマス)> TROUT, red-spotted masu / *Oncorhynchus masou macrostomus*

●M-2kg(4lb)クラス ●1.66kg ●山口県佐波川水系 ●2024/6/30 ●田村 純一 ●レギュラー会員 ●第二田村丸

### <イトウ> HUCHEN, Japanese / *Parahucho perryi*

●W-6kg(12lb)クラス ●3.35kg ●北海道宗谷郡猿払川河口 ●2024/6/10 ●酒川 郁子 ●レギュラー会員

W CR

### <イトウ> HUCHEN, Japanese / *Parahucho perryi*

●W-8kg(16lb)クラス ●2.94kg ●北海道宗谷郡猿払川河口 ●2024/6/10 ●酒川 郁子 ●レギュラー会員

W CR



田村 純一 <アマゴ(サツキマス) 1.66kg>  
魚がパニクっているうちに、一気に寄せました



酒川 郁子 <イトウ 3.35kg>  
下げ潮がきく中、少し緩んだタイミングで当たりました

## ALL TACKLE <オールタックル日本記録>

### <モヨウフグ> PUFFER, stellate / *Arothron stellatus*

●オールタックル ●2.14kg ●鹿児島県屋久島町永田防波堤 ●2024/7/4 ●鈴木 正輝 ●Jim's Salon Members

CR

### <テンジクダツ> NEEDLE FISH, keel-jawed / *Tylosurus acus melanotus*

●オールタックル ●1.31kg ●鹿児島県屋久島町尾ノ間カスミノハナ ●2024/6/29 ●鈴木 正輝 ●Jim's Salon Members

CR

### <タニガワナマズ> TANIGAWA-NAMAZU / *Silurus tomodai*

●オールタックル ●0.46kg ●三重県内河川 ●2024/7/6 ●前田 穂 ●レギュラー会員

CR

### <クマドリ> TRIGGERFISH, orange-lined / *Balistapus undulatus*

●オールタックル ●0.50kg ●鹿児島県大島郡喜界島沖水深50m ●2024/7/8 ●浅野 法子 ●ファミリー会員 ●レオンII

W

### <ヘラツノザメ> DOGFISH, birdbeak / *Deania calceus*

●オールタックル ●8.85kg ●神奈川県江ノ島沖 ●2024/7/13 ●西野 勇馬 ●ファミリー会員 ●H2O

### <イトエフキ> EMPEROR, longspine / *Lethrinus genivittatus*

●オールタックル ●0.48kg ●和歌山県串本町 ●2024/8/2 ●山岡 一信 ●レギュラー会員 ●ORENO KaYaK

### <ネズミフグ> PORCUPINEFISH, spot-fin / *Diodon hystrix*

●オールタックル ●3.43kg ●東京都三宅島 ●2024/7/3 ●奥山 文弥 ●フィッシュ&フィンズ

CR

### <アカタマガシラ> BREAM, rosy dwarf monocle / *Parascloopsis akatamae*

●オールタックル ●0.50kg ●沖縄県石垣島沖 水深150m ●2024-7-29 ●浅野 法子 ●ファミリー会員 ●ファミリー八号

W

### <トウジン> GRENADIER, Japanese / *Coelorinchus japonicus*

●オールタックル ●1.25kg ●神奈川県小田原沖 ●2024-8-4 ●西野 勇馬 ●ファミリー会員 ●H2O

### <ダントウボウ> BREAM, wuchang / *Megalobrama amblycephala*

●オールタックル ●1.34kg ●茨城県霞ヶ浦 ●2024-8-24 ●三上 隼平 ●フィッシュ&フィンズ

CR

### <ギンブナ> GOLDFISH, Asian / *Carassius auratus langsdorffii*

●オールタックル ●1.97kg ●埼玉県荒川 ●2024-9-19 ●竹内 尚哉 ●レギュラー会員

CR

### <ウメイロモドキ> FUSILIER, yellow and blueback / *Caesio teres*

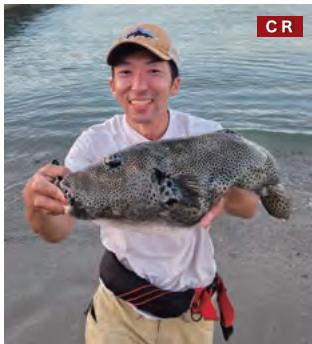
●オールタックル ●0.49kg ●沖縄県宮古島東平安名崎沖 水深約30M ●2024-9-1 ●坂本 幸博 ●終身会員 ●Sea-son'S 新静丸

<モンガラカワハギ> TRIGGERFISH, clown / *Balistoides conspicillum*

●オールタックル ●0.96kg ●沖縄県宮古島東平安名崎沖 水深約60M ●2024-9-1 ●坂本 幸博 ●終身会員 ●Sea-son'S 新静丸

<オビブダイ> PARROT FISH, yellowband / *Scarus schlegeli*

●オールタックル ●1.18kg ●鹿児島県屋久島永田堤防(30m程投げ、タナ上から6m程) ●2024-9-7 ●坂本 幸博 ●終身会員



鈴木 正輝<モヨウフグ 2.14kg>

屋久島の堤防で、バイプレーションを着底後シャクリ上げ下げして19時にヒット。これまで狙っていた大型のフグでしたが同定もできないまま計測。その後オールタックルに未記載だと判断し友人と歓喜しました



前田 穢<タニガワナマズ 0.46kg>

3回目のトライ。前回までアタリもなかったのに、今回は1時間で3尾も釣れました



西野 勇馬<ヘラツノサメ 8.85kg>

深海を狙い続けて5年以上になるのですが、ようやく新記録サイズを手巻きで釣り上げることができて感無量でした。今後も新たな記録種目指していきます



山岡 一信<イトエフキ 0.48kg>

カヤックフィッシングで、いつものポイントにて



奥山 文弥<ネズミフグ 3.43kg>

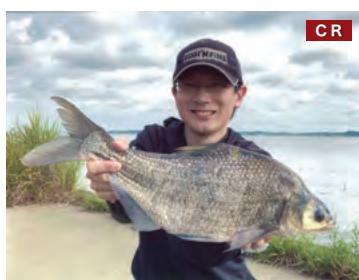
なんだそれ?と魚に詳しくない人たちから言われてしまふこの巨大なハリセンボンは私にとっては激レア。あまりにも愛らしく、素早く検量してリリースしました



浅野 法子

<アカマガシラ 0.50kg>

とても活性が悪い中、やっと小さな当たりがあり合せました。サメに食べられないように必死に巻き上げました



三上 隼平<ダントウボウ 1.34kg>

狙っていた魚とは異なる引きに戸惑いながらも、魚体を見た瞬間に大物と認識できました。無事にキャッチできて良かったです



竹内 尚哉<ギンブナ 1.97kg>

メーターハクレンを釣り、底層のウキ釣りへシフトした2投目に消込みアタリを見せたサカナはぶつといギンブナでした。まさかの本日2本目のホームランに感動



坂本 幸博<ウメイロモドキ 0.49kg>

サビキ仕掛けで2本/パリはかなり不利、釣果は芳しくないが釣れないこともあります。宮古ブルーの海から釣れる青と黄色の魚は力も強い。次回もサイズアップを狙いたいです

坂本 幸博

<オビブダイ 1.18kg>

ネリエサでのんびり粘っていると、浮木が消し込む待望の魚信。太ハリスなので強めに竿を立て針掛かりをさせてやりとり。テトラに逃げ込まれましたが、なんとか引きずり出しました



ALL TACKLE LENGTH RECORD <オールタックル・レンジスレコード>

<ハクレン> CARP, silver / *Hypophthalmichthys molitrix*

●レンジスレコード ●96cm(又長) ●埼玉県荒川 ●2024-8-23 ●竹内 尚哉 ●レギュラー会員



竹内 尚哉<ハクレン 96cm(又長)>

思いのほか気温が上がり、大苦戦中に強烈なウキの消し込み。合わせが決まり、大物ハクレンをキャッチすることができます



## ALL TACKLE FLY LENGTH RECORD <オールタックル・フライ・レンジスレコード>

### <ハクレン> CARP, silver / *Hypophthalmichthys molitrix*

●フライ・レンジスレコード ●80cm(叉長) ●茨城県利根川 ●2024-7-11 ●奥山 文弥 ●フィッシュ&フィンズ

FAL CR

FAL  
CR

奥山 文弥<ハクレン 80cm(叉長)>  
アンチリバースのビリーべイトが活躍しました。本音を言うと遠征釣りに行けないからこれで納得するしかないかなって感じでしたが、年に数回は遊びたいと思う魚です



## 10LB SEABASS CLUB <10ポンド・シーバスクラブ>

### <スズキ> SEABASS, Japanese (suzuki) / *Lateolabrax japonicus*

●M-37kg(80lb)クラス ●4.50kg ●島根県松江市中海 ●2024/6/7 ●山内 一美 ●ファイティングロッダーズ ●オスギスタイル

TR



TR

山内 一美<スズキ 4.50kg>  
ナイスコンディション!



## METER OVER CLUB<メーターオーバークラブ>

### <ソウギョ> CARP, grass / *Ctenopharyngodon idella*

●M-60kg(130lb)クラス ●122cm(全長) ●埼玉県元荒川 ●2024/7/30 ●竹内 尚哉 ●レギュラー会員

CR

### <アカメ> LATES, Japanese (akame) / *Lates japonicus*

●M-60kg(130lb)クラス ●115cm(全長) ●高知県四万十市四万十川下流 ●2024/7/22 ●新居 浩史 ●レギュラー会員

TR

### <ハクレン> CARP, silver / *Hypophthalmichthys molitrix*

●M-10kg(20lb)クラス ●105cm(全長) ●埼玉県荒川 ●2024/8/23 ●竹内 尚哉 ●レギュラー会員

CR

### <ハクレン> CARP, silver / *Hypophthalmichthys molitrix*

●M-6kg(12lb)クラス ●102cm(全長) ●埼玉県荒川 ●2024/8/21 ●竹内 尚哉 ●レギュラー会員

CR

### <アカメ> LATES, Japanese (akame) / *Lates japonicus*

●M-6kg(12lb)クラス ●102cm(全長) ●高知県浦戸湾 ●2024/8/31 ●由岐 直久 ●レギュラー会員

TR

### <アカメ> LATES, Japanese (akame) / *Lates japonicus*

●M-37kg(80lb)クラス ●129cm(全長) ●高知県浦戸湾 ●2024/8/31 ●由岐 直久 ●レギュラー会員

TR

### <ハクレン> CARP, silver / *Hypophthalmichthys molitrix*

●M-24kg(50lb)クラス ●102cm(全長) ●埼玉県荒川 ●2024/9/19 ●竹内 尚哉 ●レギュラー会員

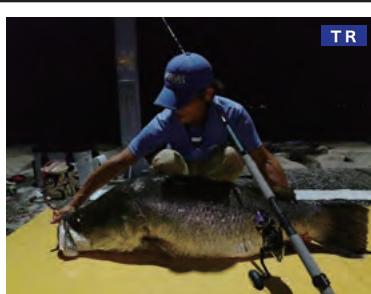
CR



CR



TR



TR

竹内 尚哉<ソウギョ 122cm>

今季何度も釣行しているポイントへ出向くと朝から本命が高活性。早い段階で喰わせ、20分間のバトルを堪能させてもらいました

新居 浩史<アカメ 115cm>

かなり走られました。ランディング後、フックが伸びており危なかったです

由岐 直久<アカメ 129cm>

(日本記録のアカメ34.40kgとおなじ魚です。コメントはそちらをご覧ください)

# ASSOCIATE MEMBER LIST

贊助会員メンバーズ・リスト



ユニコン エンジニアリング株



## 贊助会員募集

「いい釣りをいつまでも。」をスローガンに、スポーツフィッシングの普及を目指すJGFAをぜひサポートしてください。

- 特典**
1. 贊助会員主催のイベントを後援します。(ただし後援規定に基づくイベント)
  2. 実費プラス手数料で、会社パンフ、アンケートなどを会員に発送するDMサービスをご利用いただけます。
  3. JGFAイヤーブックに紹介記事が載ります。
  4. JGFA NEWS(年4回発行の会報)とホームページにロゴマークが載ります。
  5. 代表者と担当者の2名は、JGFA及びIGFAの会員として登録されます。
  6. JGFA主催イベントへの参加を優遇いたします。

**会費** 1口 100,000円(1口以上)

**備考** 代表者と担当者以外で、会員登録を希望する企業内の方は、年会費6,000円を加算いただければクラブメンバーと同様の特典が得られます。

問い合わせ先: JGFA事務局 ☎03-6280-3950

## タグ購入代金カンパにご協力を

皆様がお使いのアンカー式スパイクティガもタートタグSも、協会が購入する原価でセットあたり4000円します。年間250セットほど皆様に配布いたしておりますので、単純計算で100万円、ちょっとした金額です。そこで皆様にお願いです。クラブ主催のトーナメント、パーティ、忘年会などの機会を捉えて募金箱を回し、「タグ&リリース活動資金カンパ」を行っていただけませんでしょうか。もちろん、個人や企業の皆様からのご寄付もよろこんでお受けいたします。ゲームフィッシュの生態解明のため、釣り人ができる大きな貢献であるタグ&リリースをこれからも継続し、私たちが資源保全に真剣であることを示すため、ぜひご協力をお願いいたします。お振込先の情報は以下のとおり、なにとぞご検討を。

銀行名:みずほ銀行 恵比寿支店

口座名:「タグ アンド リリース活動資金」

口座No:(普)1561275

## タグ&リリース寄付者リスト

タグ&リリース活動資金にご寄付いただきましてありがとうございました。  
心よりお礼申し上げます。引き続き募集しておりますので、  
ご協力くださいますよう、お願ひいたします。(順不同・敬称略)

	タグ&リリース寄付者リスト	
2024/9/2	中村公則(ゴールデンベイトローリングクラブ)	900
2024/9/18	長舗 翼一郎(TRUE BLUE Fishing Club)	19,000
2024/10/15	木村 則夫(ブルーウィンド)	10,000
2024/10/31	長舗 翼一郎(TRUE BLUE Fishing Club)	19,000
2024/11/10	東京ベイ イーバ スケーミュゼティバル	62,312
2024/11/14	長舗 翼一郎(TRUE BLUE Fishing Club)	19,000
2024/11/14	渡邊清一郎(MARLIN BUSTERS)	6,000
2024/11/18	渡邊清一郎(MARLIN BUSTERS)	6,000
2024/11/20	景平 真明(レギュラー会員)	10,000
2024/11/28	長舗 翼一郎(TRUE BLUE Fishing Club)	19,000
		合計:152,212